

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会  
第13回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日 時 令和3年8月5日(木) 14:00～15:40

■場 所 釧路地方合同庁舎7階 第5会議室

■出席者(敬称略・順不同)

<専門家>

- ・高橋 忠一(再生普及小委員会 委員長)
- ・境 智洋(北海道教育大学釧路校 教授)

<学校教員>

- ・釧路市立中央小学校 前田 進太郎
- ・釧路市立新陽小学校 柴田 康吉
- ・釧路市立芦野小学校 木村 浩二
- ・釧路町立別保小学校 佐藤 祐紀
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌
- ・釧路湖陵高等学校 池田 耕

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 義務教育指導班 指導主事 平林 延祥
- ・釧路市教育委員会 学校教育部 教育支援課 指導主事 関本 裕介
- ・標茶町教育委員会 指導室 指導室長 秋山 豊
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局次長 元岡 直子、事務局員 松橋 由希
- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然再生企画官 印南 陽子

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 自然保護官 瀧口 さやか
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、安田 智子

■議事次第

1. 開会
2. ワーキンググループの取り組みについて
3. その他(連絡事項等)
4. 閉会

## ■議事概要

### 1. 開会

《配布資料確認後、自己紹介》

### 2. ワーキンググループの取り組みについて

事務局より資料1について説明後、「木のお医者さん崎川先生に聞いてみよう！木の年齢を調べてみよう！」を映写。各取り組みに関係する委員から補足の発言を得ながら、意見交換を行った。

#### 1. 湿原を題材とした学習素材の収集、活用の促進

《映像資料に関する委員からの補足》

- ・コロナ禍での実地調査が困難となった時、実際のフィールドの映像は何よりも貴重な材料であった。児童の興味、関心を惹きつけるのに十分なもので、大体のテーマ設定をすることができたり、繰り返し見られることで検索ワードを考えたりすることができていた。

《主な意見》

- ・こういう先生が来る、と事前に子どもたちに紹介することができるサンプル的な映像があると、事前学習に役立てたりすることができ、そうした意味では大変参考になる。
- ・子どもたちの調べること、興味が広がれば広がる程、先生方が支援を求めるであろうが、その際にこういった映像資料のコンテンツがあればある程、ありがたいであろう。
- ・児童には一人一台タブレットが配布されているが、自然に関する検索ワードもブロックされることが多く、データを提供してもらえることは大変良い。
- ・相互のやりとりがあるフィールド学習になったが、映像資料を事前に視聴し、児童がフィールドに行く目的を理解していたからではないかと考えている。

#### 2. 自然再生の学校教育への活用促進

《標茶小学校の取り組みに関する委員からの補足》

- ・フィールド学習後、自分たちの「ふしぎ」を改めて捉え、実際に訪れることで実感がわき課題として設定できる児童が多くいた。
- ・「失敗した」「見つからなかった」「うまくいかなかった」などの結果を、研究の成果として捉えられる児童が増えることを期待したい。課題の修正、テーマや視点をずらしていく過程を大切にできるよう指導していきたい。
- ・特別支援の児童も映像を見た時から興味を持っている様子だった。一方で、いろいろなことに興味を持ったことで課題設定が難しかったようだった。

《主な意見》

- ・出来れば多くの特別支援のクラスが湿原学習に参加してもらえるように考えられれば良い。

《釧路湖陵高等学校の学習支援、取り組みに関する委員からの補足》

- ・釧路湿原に関する基礎的内容の授業、生徒のフォローは高校の先生が実施し、専門的な部分で環境省が支援を行った。湿原巡検では具体的な調査の手順を指導し、実際に生徒が調査を体験することが出来るようにしている。

- ・学習対象として湿原及び周辺環境を捉えるという目的で実施している。同定作業を通して、虫が嫌だという生徒はいなくなった。親しむ、触る、匂いを嗅ぐ、自分で扱うということは非常に大切だと実感した。
- ・学校としては、湿原に関わる調査研究、興味を持つ生徒を一定数生むという目的もある。去年湿原巡検を経験した理数科2年生の生徒の中には、さらに精度を高めて地表性昆虫を研究したいという生徒も出始めた。
- ・理数科、普通科、生物部、1年生、2年生と広がりを見せ始めている。湿原に対する関心、研究の目が少し出始めてきており、手応えを感じている。

#### 《主な意見》

- ・湿原に関わってみたいという生徒の出身校などの前歴を知りたい。湿原を題材にした探求的な学習を経験した子どもたちが、高校に入って何かやってみたいとなってくれば、もっと変わっていくだろう。
- ・探求の課題を見つけられる子どもは、この管内は大変少ない。日本の教育全体を考えた時に、探求的な力を身に付けている子どもがこれから必要になる。湿原には水や川、生き物があり、土地の作り、土地の歴史、気象にも関わってくるため、湿原を入口に学習を行うことは非常に効果があると思う。湿原をただ湿原で閉じるのではなく、探求的な資質を身に付けていき将来的には釧路への貢献になっていくと思えば、とても良いと思う。
- ・高校生にとっても自然に対する目が出来ていることが大切で、それには小学校、中学校の時の経験が大事だと思う。
- ・湿原学習を行ってきた学校は資料に挙がっていない学校もある。湿原学習を行う時、釧路湿原を案内できる子を育てたい、案内できるレベルまで行えると良いなど思いながら湿原学習を組んでいる。探求的な力については、小学校から育てられると、中学校、高校、大人になっても役立つ。
- ・文献調査、比較検証、人に伝える場面で、きちんと伝わる基準で理解していること、体験した基準で物差しが出来上がっているということは大変重要なことだと思う。プロの方がより正確な物差しで教えてくれること、自分で体験することが、子どもたちにとっては非常に価値がある。
- ・本格的な調査の手法を正確に教えてくれる人がいることは非常に貴重であり、様々な事の出発点になることもあるかと思う。

### 3. 学校教員の関心喚起、湿原の教育的な価値の普及

#### 《教員研修講座に関する委員からの補足》

- ・参加された先生方からは大変好評だった。タンチョウが増えたことで生じる様々な問題は、自分たちの生き方にも関わってくる問題である。「どのように今後生活をしていくべきか考える視野を、本研修を通して得ることができた」、などの感想を頂いた。
- ・参加者は小学校の先生が多かったが、沢山の中学校の先生にも聞いて欲しい内容だった。野生動物との共生を通して、どのように私たちが生きていくのかという視点や考え方を、進路が多岐に広がっていく中学生の子どもたちにも広げていきたい。我々の課題として、如何にして子どもたちに還元していけるかということだと考えている。

### 《主な意見》

- ・当該講座は、テーマに実際に関わっている方から、良いことだけでは無く様々な課題も併せて説明していただける。多くは教え方を研修する講座が多く、教材、対象自体をじっくり考える時間や、人や現場にあたる機会はなかなか持てない。このような機会は我々も本当の意味での教材研究ができ、理解を深めることができる。
- ・昨年度実施されたオンライン講座に参加し、心を動かされ、小学校4年生から6年生を対象とする釧路湿原国立公園連絡協議会のこどもレンジャー事業の中で同じテーマで行事を企画した。
- ・企画を行う側にとっても、現場に行ってみる機会は大変ありがたい。専門的な観点からもう少し深掘りできるような、少し踏み込んで中身を知れる機会を設けていきたい。
- ・保護一辺倒ではなく今後どのように人間と付き合うのかということ、社会とつながっていくのかということを考えなければならない時期に入ってきているのではないかと思う。
- ・企画する側も常に情報をアップデートしつつ行っていく必要がある。

### 《フィールド学習に関する委員からの補足》

#### 【釧路市立中央小学校5年生】

- ・8月、9月に温根内に2回行く予定。見る、触れるということが第一なので、1回目の訪問では、説明を受けながら興味を持つという段階だと考えている。2回目にはそこそこの知識を持って植物を見られるように湿原学習ができればと考えている。

#### 【釧路町立別保小学校5年生】

- ・湿原学習は3年目だが、1年目は事前学習が少なすぎて、ただ湿原を見てくるという遠足に近い状況になりがちだった。今年は、事前に調べ学習を行い、各自のテーマを持って湿原に行くことにした。フィールド学習後、テーマを変更したいという子どもたちもいて、実地調査をするということが、子どもたちに大きな影響を与えるということを実感した。
- ・今後、1人1テーマで調べ学習を進めていく。iPadで作業をさせていくことを考えている。考えは深まるが手書きでまとめるのが苦手な子、そこに時間を割いてしまい広がらない子もとても多く、そこを変えてみてはどうかと考えている。

#### 【鶴居村立幌呂中学校1,2年生】

- ・今年度初めて湿原学習を行う。鶴居村ではタンチョウをテーマとする必要があり、タンチョウが住んでいるフィールドに連れて行くということで総合的な学習の時間で実施できないか検討もしたが、内容を組み替えたばかりということもあり難しい部分もあった。理科単独で実施する。鶴居村としてタンチョウは大切なテーマであるが、環境をテーマすることで観光も関わってくる。鶴居村としても良い内容にはなるのではないかと思っている。
- ・生徒は身近な自然について良くわかっていない。学習を通していろいろな人と接して欲しいということも大きなねらいとしてある。
- ・虫が苦手という子も多い。グロテスクだと言って排除することは反多様性だと思う。そういう部分でも、いろいろとつなげて自然体験から広げていけるものを考えていきたい。

### 《主な意見》

- ・国立公園連絡協議会で実施しているこどもレンジャーの取り組みでは、「学校でもやったので来てみたい」という子が参加してくれていた。プラスアルファで関心を持った子がさらに次のフ

ィールドに行ってみたいということにつながる。小学校でも行事を案内する機会をいただければと思う。

#### 《研究発表ボードを活用した探求的な学習に関する主な意見》

- ・昨年度研究発表ボードを活用した。これまでの知識の延長という部分もあり、なかなか広がりがなかった。コロナ禍の状況にもあり、フィールドに出ていくという機会も持てなかったので、インターネットの情報に頼ることが多かった。既習のものと調べたものを取りまとめた形だが、出典を明らかにすることを大事にした。
- ・一度に理想的な状態になるわけではなく、何年か取り組むことで研究発表ボードの使い方に慣れてくるといったこともある。
- ・標茶小学校は学習に深まりが出てきており学校としても定着している。担任は湿原学習に携わるのは2回目、小学校として取り組みが継続していけると良いと感じる。
- ・町内にどのように広げていくかということが課題。環境は故郷教育とも切り離せない部分だと思っている。教育課程を組んでいく時に、各学校では基本的に総合的な学習の時間の内容は取り組みが決まり落ち着いてきており、新たな取り組みを行うことは難しい部分もあるだろう。理科や生活科、社会、道徳、国語などにつなげていって学校として一本の柱になっていけば良いなと考えている。教育委員会としても、そういう働きかけができていけば良いなと感じた。
- ・特に学校教育の中では、新たな取り組みには先生も生徒も戸惑いがあり、新たな発想で問題を自分で考えていくようになるには少し時間がかかるように思う。
- ・総合的な学習の時間で、様々な地域の課題や、学校の課題、子どもの課題を取り入れて毎年変わっても良いものであろう。学校の先生の意識も変わらなければならないと思うし、校長先生の意識も変わっていけば良いなと考えている。
- ・探求の過程ということで研究発表ボードを形式化してやっていこうと考えたのは、探求するというをどのようにしたら良いかわからないということだったので、まずは形式から入りその中から広がっていけば良いだろうという願いがあった。今回、釧路湖陵高校から子どもたちが湿原の方に目が向いているという話が出た時に、一つの成果だと感じた。これからは成果を示していかななくてはならない時代に入ったと思う。事務局も成果を示していくことが必要になってくる。湿原学習を行うことで力がついてきて、いろいろなことに探求的な力がついているというようになっていけば良いと思う。先生方に子どもたちがどう変わったかを聞き成果としてまとめていけると良い。
- ・他県と比較して、北海道の探求は弱い。釧路が湿原を題材として探求を実施することは大変大きく、将来的に釧路湖陵高校のスーパーサイエンスハイスクールももっと先進的にいくのではないかと思うし、もっと展開できるのではないかと思う。また、子どもたちの成果を市民に広げる場面、研究発表が出来れば良いと思う。きちんと評価してあげる場ができるのもっと意欲が高まっていくのではないかと思う。サイエンスフェアは大事にしていきたい。
- ・今後取り組むべきことは多岐にわたる。時間をかけて標茶小学校で積み上げてきており、釧路湖陵高校ではリーダーシップを取れる状態になってきている。これらの学校が先頭をきって、少しずつ動き出しかけている状態だと思う。特に北海道、道東の学校で一步二歩踏み出すことが出来れば、新しい展望が見えてくるような気がしている。

### 《議事内容全般に関する主な意見》

- ・知床ウトロ学校は9年間の義務教育学校であり、総合的な学習の時間では、知床学習を小学校3年生から9年生まで継続して行っている。陸、海、観光などのテーマを小学校の段階から調べ、中学校では知床のために出来ることを自分たちで課題を見つけて取り組む。大枠は決まっているが毎年カリキュラムは変わる。7年間の積み重ねによって、子どもたちにすごい力が付いていく。また、郷土愛が大変強い子が育っており、将来何らかの形で地域に恩返しをしたい、戻ってきたいという子どもの割合がとても高い。異校種が上手くつながり釧路湿原という大きなテーマで学習を深めていくことはできないだろうか。同じテーマを繰り返しているように見えるが、一回取り組んだことをもう一度扱うと、子どもは新たな疑問があり、探求的な学習につながっていく。
- ・総合的な学習の時間は教科等横断的な視点が必要で、湿原学習は、理科、社会、総合的な学習の時間に直接的に関わる内容だと思う。そういったことが出来ればもっと広がっていくだろう。
- ・知床学習が広まっているのは、教育委員会や地元の知床財団、民間の会社など、先生向けの研修、地域を体験する機会が設けられていることも大きい。そこで先生方も学ぶ。大人でも強く印象に残り、管内に異動した時に良かったことを伝えてくれ、異動した学校で知床学習を行っているという例もある。学んだことが他の地域に広まっていくように、先生方にも釧路湿原の良さや学ぶ意義を広めていくと、学校に広がっていくだろうと感じた。せっかくの地域の資源を何とか活用していければ良いなと強く感じた。

### 3. その他（連絡事項等）

ワンダグリーンダプロジェクト活動報告2020、釧路湿原野生生物保護センターパンフレットについて説明後、次回のWGは冬休み期間に開催を予定していることを連絡した。

### 4. 閉会